
アルファという犬

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルファという犬

【Nコード】

N9280P

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

いつの頃からかは分からないが、世界を変えることのできる力を持った道具が存在する。その道具を手に入れた人間と、道具を探す組織の話。

ある夏の日（前書き）

12部の予定です。

ある夏の日

時計は三時を指そうとしていた。

柳田は部屋の時計と、自分の腕時計を見比べながら、時間のズレがないことを確認すると深い溜息をついた。約束の時間はとうに過ぎている。

数時間前に、使用人が煎れたコーヒーをすする。

昨日の事件以来、ラジオなど本当は聞きたい気分ではなかったが、窓際に置かれてあるラジオの音が、辛うじて退屈を紛らわせていた。

「お待たせして申し訳ありません。」

そう言ってドアを開けたのは、まだ若い男だった。

「杉本といいます。」

「柳田だ。」

八月の炎天下だというのに、杉本が雨傘を持っているのを、柳田は奇妙な物を見る目つきで視線を落とした。

「ああ、これは。持っていないと不安になるんです。」

言い訳の様にもとれる苦笑いと整った顔立ちが、柳田をさらに苛立たせた。

「どんな奴が来るかと思えば・・・まさか通訳ではないだろう。」

杉本は、それなりの服を身に着けていた。

「ええ。私はこちらの国の人間ではありません。まあ、人種は同じですけどね。」

「仲間ではない・・・か。」

「はい、そう思っていただいてかまいません。」

使用人がコーヒーを持ってくると、「暑いので冷たいお茶はありませんか?」と杉本は額の汗をハンカチでぬぐった。

「それで、杉本さん。今日は何のようだね。こちらも暇ではないので、手短に済ませたいのだが。」

「はい。すぐ済みます。」

杉本は、差し出されたお茶を一気に飲み干した。

「柳田さんは、何故、この国が他の国のように、完全に支配されなかったと思いますか。」

「さあ、どうしてだろうな。それに我々の国だけ、という訳でもないだろう。」

「はぐらかさないで下さい。本当はご存知なのでしょう。」

「私は手短に、と言ったんだが……。何だ？はつきり言ってくれ。」

杉本は、さっきまでのにこやかな表情から、感情の無い能面のような顔になった。柳田はぞっとした。青年の吐き出される息さへも、何かを凍らせることのできるくらい冷たい気がしたからだ。

「我々が望むものを頂ければ。それで良いのです。」

「やっぱり、それが狙いか……。私が君に呼ばれた時に覚悟はしていたよ。」

杉本は、ポケットから一枚の紙を取り出した。

「元帥からの正式な書状です。」

柳田は杉本から奪い取り、書状を読んだ。みるみる青ざめていく様を、青年は無表情で見つめていた。

「気になさることはありません。柳田さんの事など、いえ、あの研究所のことなど、国民が知るはずが無い。それに、アレがすでに機能していなかったことも、こちらは知っています。」

「新しい持ち主を探す気か？」

「さあ、そこまでは私の管轄ではありませんから。私はただ、デルタを回収することが任務なので。」

「あれは、お前たちなどに渡さんぞ。あれは……。あれは我々にとっては。」

呪いの呪文のように、柳田が繰り返し呟いている。

「もう一度、お聞きします。」

杉本は、ソファから立ち上がった。そして、柳田の耳元に顔を近づけると、

「何故、この国が他の国のように、完全に支配されなかったと思いますか。こんな国、我々なら一瞬で消し去る事だって出来るんだ。こんな資源も面積も無い国は、はっきり言って使い道なんて無い。それをわざわざ大事にお前らに残して、その上まだ政治をさせようとしてるんだ。それが何の為なのか、わからないなんて言わせないぞ。」

「ぐう。」

杉本は、にっこり笑った。

机の上の灰皿を手に取り、持っていたライターで書状を燃やすと、机に突っ伏して動かなくなつた柳田に別れを告げた。ドアを出ると同時に、使用人が慌てた様子で柳田に駆け寄った。

「研究所からお電話です。その、緊急のようです。」

フラフラと電話に近寄る。受話器を取ると、誰も出てこない。

「おかしいな。さっきは、早く所長を出せと・・・。」

使用人の困った様子から嘘は感じられない。

「おそらくもう、研究所は。」

柳田は、その場に崩れ落ちた。

屋敷から出ると、無数の蝉の声が聞こえた。

どこから啼いているのかはわからない。

だが、頭の上に降ってくる五月蠅さといったら。

「まるで、僕を責めてるみたいだな。」

杉本は、空を見た。

「雨でも降れば、うっとおしい声は泣き止むのかな。」

そういつた瞬間。

ポツリ

雲ひとつ無い空から雫が振ってきた。

杉本は、蟬が泣き止んだのに上機嫌になって持っていた傘をさす。屋敷の門を出たすぐ横に、黒い車が付けてある。

運転手は、突然の雨に戸惑っている様子も無かったが、杉本が鼻歌を歌いながら後部座席に座ると悪態をついた。

「俺は雨はキレイなんだ、って前に言ったよな。スギモト。」

「ま、たまにはちゃんと使ってあげないと・・・ヴィタが拗ねてしまふからね。」

はにかみながら、雨傘を撫でる。その行為を運転手はミラー越しに見て舌打ちする。

「ついさっきだが、研究所は制圧されたようだ。」

「制圧ねえ。どうせ跡形も無くなっているんだろう。」

丁寧に傘をたたんでいく。まるで思い人の肌に触れるように指先をわずかに添わせる様子が何処か淫靡であり、異常である。運転手は瞳の青い人形のような顔の優男だったが、その端正な顔立ちの男は、このスギモトという男が嫌いだった。だが、彼は自分の上司だから言うことを聞かなければいけない。上司が、どんなにおかしな性癖をもっているとしても。

「こんな雨では、本部に帰れないぞ。どうにかしてくれ。」

苛立つ運転手に、杉本はあくびをしながら答える。

「もう少し、もう少しだけ。このままで・・・。」

「いい加減にしろ。こっちだって急いでいるんだ。任務が終われば、国に帰れるんだぞ。」

運転手は、こんな国など一刻も早く去りたいようだった。

車から聞こえてくるラジオの言葉は、彼には全く理解できない。

「昨日なんて、蒸し暑いし息苦しくて一睡もできなかった。虫の声は五月蠅いし、俺は早く故郷に帰りたい。それに加えてお前みたいな奴の言うことを聞かなければいけないなんて、上の奴らはどうかしてる。大体お前なんて・・・」

そこまで言って、運転手は口をつぐんだ。

後ろに座っているさっきまでの男とは違う、別の視線を感じたか

らだ。

心臓を抉り取られるのでは、と思うくらいの強い誰かの視線。しかし、後ろには杉本しか座ってはいなかった。

「ヴィタ。僕は大丈夫だから。」

まるで、恋人をなだめるような優しい甘い声だった。

「うぐっ・・・はぁ・・・」

運転手は今にも意識を失いそうになっている。ぼんやりと意識が薄らいでいく中で、杉本の声が遠ざかっていく。

「ヴィタ、君だけが解ってくれれば、僕はそれでいいんだ。」

「た、たすけ・・・」

「愛しているよ、ヴィタ。」

強い日差しが降り注ぐ中、運転手は気がついた。

「今・・・さっきのは・・・いったい？」

杉本が、ぽんっと膝を叩いた。

「さ、早く車を出してくれよ。居眠りしている場合かね？」

運転手があわててアクセルを踏む。

杉本が後ろから無理やりラジオのスイッチをつまむ。

「この国の言葉は、よくわからないよ。」

杉本の鼻歌が聞こえる。

アイル・ネヴァー・スマイル・アゲイン

そんな曲だった気がする。

ラジオの音は、ぶつぶつと音を立てて消えてしまった。

病室の少年

直人が目覚めたのは、病室のベッドの上だった。

「ぼく……。」

死ななかったのか。

その言葉は、ただ口を動かただけで誰の耳へも入らなかったが、
変わりに一筋の涙が零れた。

「直人君、目が覚めたのね。」

隣に、若い女性が座っていた。髪を顎のラインで切り揃え、耳には大きなイヤリングが付いている。組まれた足はすらりと長く、タイトなスカートがその曲線美を際立たせていた。足先のスリッパは兎のような白い毛に覆われていて、何故か見てはいけなような気がして直人は目をそむけた。

目覚める直前まで読んでいたノートを椅子に置いて立ち上がると、
しなやかな指先で直人の頬の雫を掬いとった。

「お母さん呼びましようね。」

「……いい。」

「部屋の外にいるわよ。」

「呼ばないで。」

かすれた声で必死に女性に訴えた。

「そう。」

彼女は、また椅子に座ると、ノートを開いて読み始めた。

直人は自分の手足をみた。

手首へと繋がれている点滴のチューブ以外何もなかった。学校の屋上から飛び降りたのに、怪我ひとつしていなかった事に直人は顔をしかめた。

「僕、屋上から・・・」

「ええ。飛び降りたわ。」

「・・・生きてる。」

「そうね。検査の結果、異常は見つからなかったわ。」
切り揃った髪が風で揺れて、唇にかかる。

真っ赤なルージュが印象的だ。

「お姉さんに、どこかで会った気がする。」

直人は、ふと、そんな気がしたのだ。

懐かしい人に会うような、不思議な気分…。

何が面白かったのか、女性はクスクスと笑った。

「可愛い顔して、そんな口説き文句どこで覚えたの？」

女性は、鞆から名刺を出して直人に渡した。

「漢字、読めるかしら？ 私は『未知能力開発研究所』の古林美智子と言います。」

「みち、のうりよく開発？」

「わかりやすく言う。私たちは、まだ解明されていない不思議な力を研究しているの。例えば超能力とか予知能力とか、わかる？」

直人は頷いた。

「略してMNKよ。」

初めて貰った名刺を、どうすればいいのかわからずに、両手で遊ばせながら、

「その、古林さんはどうしてここにいるの？ 僕に何か用？」

と、まだ、何も掴めていない様子で古林を見た。

古林は持っていたノートを、直人に渡した。

正確に言えば、持ち主に返した。

「すごいじゃない。十歳で作曲ができるのね。」

直人は貰ったノートが、五線譜ノートであるのに気づいた。中を開くと、自分が書いたものだとすぐにわかったが、中身はビリビリに破られたり、落書きされた痕があった。

「あ・・・。」

直人の頭の中に何かとても黒いものが、墨のようにボタボタと降り注いでゆく。

「い……いやだ。」

瞳は、熱い光が記憶を呼び覚まそうとゆれている。

「思い出したくない。」

そうだ……僕は。

直人は、五線譜ノートを投げ捨てた。それは、勢いよくドアにあたり、向こう側から心配そうに直人の名前を呼ぶ母親の声が聞こえてきた。

「直人！大丈夫。一体中はどうなっているのですか。先生！」

母親の声が耳に入った途端。直人は落ち着きを取り戻した。

「はぁ……はぁ。」

古林が、そっと床に落ちたノートを拾った。

「どうやら、一時的に記憶がなくなっているようね。」

「え？」

「直人君、どうして学校の屋上から飛び降りたのか覚えてないんじゃない。」

直人は黙ったままだった。

「いいのよ。仕方が無いわ。飛び降りて無傷なんて可笑しいものね。」

古林は、無意識にスリッパを撫でていた。

「お母さんに会いたい？」

「今は……。」

何故だろう。どうして会いたくないのか直人には分からない。それなのに、何かとんでもない事を犯してしまったような、顔をあわせたくない気持ちになってしまう。ドアの向こうから母親の泣き叫ぶような声が聞こえているのに、直人は、はつきりと、

「会いたくありません。」

しばらくすると、ドアの向こうの声は止んだ。
変わりに、男が数名。直人と古林を車に乗せて病院を後にした。

刑事の話

「あつつたたまきましたよ。」

山羽は、自分の机を思いっきり拳で叩いた。

「止めとけ。一課を全滅させる気か。」

「そんなこと言っただって、このままじゃ何のために刑事やってるのか解りませんよ。」

短く刈り上げた頭を掻きむしりながら、山羽の怒りは届いたばかりの弁当に向かった。勢いよく白米を口に入れる様子を、あきれた様子で上司は見つめた。

「MNKには、ワシだって苛立つとるよ。しかしな、まあ・・・ちよつとは落ち着け。」

『未知能力開発研究機関』・通称『MNK』は、まだ解明されていない不思議な力を研究している組織で、子供の能力を最大限引き上げることを目的として教育施設の視察や、建設、良質な教育者に育てるための指導などを主な活動としているが、人間の力ではどうてい起こせないような事件を独自で捜査し、その不思議な力を解明することも行っている事は一般の人間には知られていない。

「落ち着ける訳が無いでしょう。本当に胃に穴が空きそうなんです。どうするんですか、あの殺人事件は未解決のままになっちゃいますよ。証拠が無けりゃホシをあげられないでしょうが。」

ずずずと緑茶をすすする。

「被害者は、火をつけられて殺されたんだろう。そんなの、見なくて正解だったじゃないか。」

山羽の箸が一瞬動きを止めた。今日の弁当は焼肉弁当だったが、

再び何かを断ち切るように箸は俊敏に動き始めた。

「アイツら、ちょっとでも変な事件が起こったらすぐに駆けつけて、現場の物を洗いざらい持って行きやがる。その上、散々嗅ぎ回って何の不思議も見つからなけりゃ、пойつと捨てる。事件の解決なんてどうでも良いんですよ。俺たちは、あいつらが食い散らかした後の事件を引き継いでまた最初から調べなোসんですよ。時間の無駄の上に犯人だって逃げちまう。もう、どうにかして欲しいです。」

言っているうちに、何粒かのご飯粒が空中を舞っていた。「この前の、プールで人が亡くなった事件だってアイツら水の栓を抜いて凶器が流れて見つけるの大変だったし、死体が瞬間移動したって騒いだ事件だって聞き込めば単なる勘違いだったのを、M N Kが応援まで呼んで、よくわからない実験に参加させられたり。電気ヒトデの時だって・・・」と、最後は何やら訳のわからない言葉を呟きながら、空になった弁当をゴミ箱に放り込んだ。山羽は、このM N Kという摩訶不思議な組織に振り回されて一週間は眠れなくなったことがあった。でも、従わなければいけない。この組織は、警察や自衛隊など、本気を出せば、いとも簡単に動かすことができるのだから。

「お前の言ってたことは、お前がさっき食ってた弁当みたいだったな。」

頬に飛んできた白米を、ティッシュ越しに掴みとって捨てた。

「一番腹に据えかねる女がいますね。」

山羽の眉間が、最大限に中央に寄った。

「あの、日本人形みたいな髪のお嬢さんか。」

上司は、何かを思い出したようで、山羽をみて、にやっと笑った。「ま、顔はまあまあだな。」

「何言ってるんですか、澤さん。あんなの、まあまあでもぼちぼちでもないですよ。ああ。思い出すのも恐怖です。元はといえばあんな変な組織と関わる事になったのも、あの古林とかいう女が原因でした。」

「そういうところから恋が始まるのも、ドラマの世界なんかじゃ良
くあることだ。」

山羽は危うく、人生の先輩の頭に口に含んだ茶を掛けてしまおうと
ころだった。

「ごほっ。ごほっ……。止めてくださいよ。」

携帯電話が鳴ったのは、その直後だった。

SF映画で悪役が登場する時に流れるテーマ曲。

すぐに相手が分かるよう、特別に設定してある着信音だった。

「ほれ、言ったそばから。」

山羽の狼狽振りは尋常ではなかった。みるみる顔色が悪くなって、
よく見るとわずかに震えている。彼は、本気を出せば大人の男三人
を相手にできるくらい力があるはずなのだが、この刑事には今ま
で出会ったどんな凶悪な犯罪者を例に上げても、MNKという組織
はその比ではないらしい。

「登場人物が揃わなけりゃ、物語は始まらんからな。ま、がんばっ
てこいや。」

山羽の目は完全に死んだ魚の目をしていたが、体はしっかり携帯
電話を掴んで耳元にあてていた。小さく返事をする、自然と胃の
あたりに手を置いて撫でている。その様子を上司は羨ましそうに見
つめていた。

「ワシは仕事が減って、退屈で死にそうだ。お前の仕事を分けて貰
いたいもんだな。」

定年前の上司は、ぬるくなった茶を一気に飲み干した。

アルファという犬

黒いバンが止まった。

中から、男が一人現れて、建物の中に入る。

入り口にはキャリアウーマン風の若い女性が待っていた。

「お久しぶりです。山羽刑事。」

紅いマニキュアを塗った指が、軽く揺れる。

「ああ、お久しぶりです。古林さん。」

ひどく冷たい響きのある声だった。

「あなた方が介入する事件には、二度と関わりたくないと思っています。たんですけどね。」

「まあ、ひどい。」

古林は、笑顔で答えた。

首都圏から少しだけ離れた所、木に覆われてはいるがコンクリートが剥き出しの建物は、中に入ればただの施設ではないことがわかる。

何部所も分かれた研究所と、見たことのないような機械の数々。

ここが、未知能力開発機関―MNKの本部なのだ。

山羽が案内された部屋は、MNKの局長室。ドアを開ける前に、胃のあたりを擦るのは恒例になっていた。部屋から顔を覗かせたのは二人の初老の男だった。

「そんなに怖い顔をしなくても良いじゃないか。山羽君。」

今時、口ひげをたくわえた人などあまり見かけなくなったが、この局長は貴重品種らしい。社長椅子に座り、まるで板垣退助のような立派なひげを撫でながら微笑んでいるのがMNKの最高責任者、榛原局長だ。

「とって食いやしないよ。なあ、五十嵐。」

親しげに名前を呼ばれたもう一人の男は、山羽が学生時代に一度も及第点をくれなかった、大学の教授に似ている。五十嵐と呼ばれた男は薄い色のサングラスをかけていて、その奥のガラス玉のような瞳は一筋の光も受け付けない。彼は生まれたときから漆黒の暗闇しか知らないのだ。

その盲目の彼がこちらをみて優しく微笑んだ。

「山羽君。アルファが悲しんでいるよ、ほら。」

足元で、くうんと、泣き声がする。むっくりと起き上がったのは山羽の顔を挨拶代わりに舐める為だった。それを見て、山羽の顔はたちまち青ざめていった。

「い、いやだ。帰りたい・・・。」

古林が「またですか」と困った顔をした。

「何言ってるんですか？ さっさと中に入ってください。」

「そうだよ、山羽君。局長室にくるのは初めてじゃないだろう。」

榛原は苦笑いしている。

「だって、アルファがいるなんて聞いてない。」

一歩ずつ後ずさりしていく山羽をみて、古林は舌打ちをした。

山羽の狼狽振りは尋常ではなかった。みるみる顔色が悪くなって、よく見るとわずかに震えている。かと思えば、首を横に振って「いやー」とか「ひゃー」とか意味不明な言葉を発しながらその場にうずくまってしまった。

「いい年をして、なに怖がってるのよ。」

山羽は、アルファという犬がとてつもなく怖いのだ。

「このままじゃ、話が進みませんので。山羽刑事、ごめんなさい。」壁にしがみ付いて離れない山羽を、古林はドアの向こうの部屋に放り込んだ。

ごろんと横になる山羽と同時に、五十嵐の足元からアルファが歩き出した。

顔の前に、「はあはあ」と荒い息がかかる。

「く……くるなっ！」

「ほんと、どうしてこんなに可愛いアルファを怖がるのかしら。」
「全くだ。」

低い、バリトン歌手のような声が心地よかった。

がぼっ。と起き上がり、山羽はアルファを睨んだ。恐怖で引きつったままではあったが、精一杯の怒りを黒い犬に向けていた。

アルファは鼻で笑った。

「山羽刑事。お元氣そうでなにより。」

「うるさいっ。」

そう。

お分かりのとおり、アルファは人間の言葉を話せる犬である。

アルファは、高い知能を持って人と会話ができる、いや、人間以上の知能を備えている。この犬もちゃんとしたMNKのメンバーなのだ。それを知っているのは、ごくわずかな人間のみだが。

「全く理解できない。こんなに可愛いのに。」

「自分で言うなっ。」

「アルファ、あまり山羽君をからかうと本当に嫌われてしまうよ。」
五十嵐がアルファの頭にそっと手を置いた。

「教授に言われたら、やめるしかないな。」

飼い主に従順な犬は床に腰を下ろして『おすわり』の姿勢をとった。人間で言えば非常に残念そうな顔をして。

「おや、山羽刑事。足元が汚れているよ。」

「煤ですよ。さっき、事件現場にいたので。」

ズボンのすそを払うと、空気中に黒い粉が舞った。アルファがそれを鼻を動かして臭う。

「人が燃えたのかね？」

「ええ。一人死んでいます。」

「ふむ。」

五十嵐が首をかしげた。

「アルファ。何か気になるのかな？」

返事の変わりにアルファは後ろ足で耳を掻いた。

「それで、MNKがわざわざ俺を呼んだ理由は何ですか？」

山羽が苛立った様子で、しかし犬からは距離を置いて質問した。

「それなんだがね。山羽君。」

榛原は、立派なひげをなでながら、

「また、古林君に協力して頂きたい。」

と、もう山羽が何度聞いたであろう台詞を答えた。

すかさず、古林が間に入り込む。

「榛原局長。山羽刑事に彼を会わせてもよろしいのですね。」

「ああ。仕方ない。」

「彼って……。」

「我々が保護しています。神崎直人という少年、ご存知でしょ。」

「かんざき……ってもしかして。」

「そう。君がさっきまでいた事件現場。その、重要参考人の神崎直人だ。」

プラットホームの女子高生

美智子の長い髪は、ホームを行き交う強い風にたたき付けられていた。唇の上に髪が触れたとき、よく見れば彼女の頬が涙で濡れているのがわかった。

電光掲示板が赤いライトで電車通過の合図を出した。特急電車はこの駅には止まらない、それを美智子はよく理解していた。

「ふう。」

美智子のため息は、女子高生とは思えないような年老いたため息だった。人生に疲れたような、立っていることも面倒なような・・・。

「白線の内側に」というアナウンスが聞こえ、美智子は一歩前に踏み出そうとした。その先にホームはなく線路に落ちてしまう事を当然、美智子は解っている。

「・・・ん？」

彼女の体は硬直して動かなかった。

フアアン

電車の音が近づいてくる。

『どうして？動いてよっ。』

心の叫びが聞こえたのか、美智子の隣に立っていた若いサラリーマン風の男が、彼女の異変に気がついて声をかけた。

「ねえ君。早く飛び降りないと間に合わないんじゃない？」

『え。』

男は彼女の驚いた顔をみると、堪えきれず吹き出した。まるで悪

戯が成功して嬉しくて仕方がないともいうように。

「ぷっ。そんなに震えてちゃあ、ちよつと無理だね。お嬢ちゃんに自殺なんて出来っこないよ。」

美智子は「どうしてこの人は自分のやろうとしていることが分かったんだろう」という顔をした。

「ほらほら、もうすぐ電車がやってくるよ。」

美智子の絶望した目とは違い、欲しかった玩具を手に入れた子供のようにサラリーマン風の男は目をキラキラさせた。

「じゃ、お先に。」

かわいらしく手を振った後、吸い込まれるように線路の中へと消えた。

「あっ。」

美智子が手を伸ばして男を掴もうと一歩踏み出した。
瞬間。

耳を劈くような轟音と、何人もの悲鳴。

美智子の目にノイズが走った。

「お嬢ちゃん？」

急に視界が元に戻り声のする方へ振り向くと、飛び降りたはずの男が美智子をじっと見ている。

「白線の内側に」というアナウンスが聞こえた。

男は少しだけ右にずれていたネクタイを直すと、悪戯な笑みをこぼした。

「ビックリした？」

ピースサインと、口元から真っ赤な血が流れた。

「アンタさっき死んだのに、なんで生きてるの？ って顔してるね。」
恐怖に震えた美智子が、

「あなた、何なの。」

「僕は

ガタンガタンガタン

電車が通過する音で、男の声は聞こえなかった。

「まだ若いのに、人生これからだよ。」

最後に聞こえた言葉は、美智子の心に何の響きも与えられなかったようだ。

「でも、お嬢ちゃんみたいな生き方だと、これから何やっても楽しくないかもね。」

「あ・・・あなたに何がわかるのよ。」

「わからないね。ボクは君みたいに簡単に命を捨てない。」

「でも、今さっき。」

「ボクは何でもできるんだ。それこそ、今みたいに時間だって戻せる。」

美智子は、男を目を見た。灰色がかった瞳は、日本人離れていてとても奇麗だった。その所為かどうかは分からないが、美智子は

羨ましそうに彼を見つめた。

「私にも、できるかしら。その・・・あなたみたいなこと。」

男は内緒話のように、彼女の耳元で囁いた。

「さあ。『あれ』は人を選ぶからね。」

「じゃあ、『それ』があれば、何でもできるのね。」

男と美智子は、もう少しで頬が触れ合うくらいの距離で見つめあっている。

「できるよ。」

「どんなものの？何処にあるの？」

美智子の頬が火をつけたように紅くなった。憂いを帯びていた瞳が、命の輝きを取り戻したようにキラキラと照明を反射した。

「あげないよ。」

美智子の唇が男の唇と重なる。

「！」

男は、手の甲で口元の血を拭った。

「君とは多分何処かで会えると思うんだ。」

強い風が、ウェーブのかかった髪を持ち上げる。長い睫毛がゆれた。

「言っとくけど、君に対して恋愛感情なんてさらさら無いんだけど。ボクのこと忘れられちゃあ困るからチューしただけだからね。これ、フランス式なの。いや、嘘だけど。」

美智子は、男の血で紅く染められた唇を両手で覆った。

「いいかい。人生っていうのは一度きりなんだよ。それを、簡単に止めちゃあモッタイナイ。どうせ生きるなら、それこそ映画や小説の世界の主人公のようにならなくちゃダメだよ。」

「はあ。」

「それじゃあ、美智子くん。お元気で。」

遠くで声が聞こえたと思うと、男の姿は向かい側のホームにあった。

「事実は小説より奇なり。現実世界のほうがよっぽど不思議なものだよ。」

それから数年間、美智子があの男に出会うことは無かった。

数年間は。

蘇る記憶

「で、具体的に何をすればいいんですか？」

地下へと降りるエレベーターの中で、二つのケースを持っている古林は肉食的な笑みを浮かべた。一つは小さめのスースケース、もう一つは細長い重たそうなケースだった。

「お忙しいのに、いつも刑事にはお世話になって申し訳ございませんわ。」

「それは、いつも警察の仕事を奪うMNKの人間から出た言葉とは思えないですねえ。一体何を考えているんです？古林さん。」

こんな若い女に負けてたまるかという様子で、山羽が返答した。

「さあ、どうなんでしょうね。おほほほ。」

美智子は切りそろえてある髪を揺らして、笑う。

エレベーターのドアが開き、長い廊下が続く。病院のようだったが、地下なので一層陰気臭い。

「本当に、俺の担当している事件の重要参考人なんでしょうね。あなた方が、少年を保護しているという報告は聞いていましたけど。」

「ええ。ただ・・・何と言うか、ちゃんと話が出来る状態ではなくて。」

「と、いうと。」

「事件の記憶を一時的に失っているんです。」

山羽はポケットに入れてあった手帳を開いて書き込み始めた。

「神崎直人君が、小学校の屋上から飛び降りたのは聞いていますよね。発見されたのが校舎と校舎をつなぐ渡り廊下の屋根の上です。屋上から飛び降りなければ、あの場所には落ちませんからね。飛び降りた事は本人も覚えているようです。」

「・・・なるほど。」

山羽の手帳を覗くと、事件の内容はこうだ。

小学校の屋上で生徒が焼死体で発見された。

実際に事件が起こったのは、昼休みと思われる。授業が始まったのに現れない生徒を探していた教師が屋上で死体を発見した。その時すでに火は消えていたようだ。

屋上は昼休みのみ開放され、被害者の生徒はたいてい校舎の屋上で友達と遊んでいたらしい。

神崎直人が飛び降りたのは、それと同じ時刻である。

神崎直人という少年は、焼死した生徒と同じクラスだった。大人しい生徒で友達がいなく、休み時間も一人で過ごしている。神経質などころがあり学校の出席日数が少ない。学校に来ても、教室には行かずに音楽室で過ごしていることが多い。

母親が警察から事情徴収を受けた時は「息子は誰かに虐められていた」と証言している。

二人が同じ時間に現場にいたのは確かなのだ。

山羽は手帳をポケットにしまった。

「山羽さんは、直人君を犯人だと思っていらっしゃるの？」

「いや、まだわかりません。もし彼が犯人なら子供であろうと法の裁きをうけなければいけません。何でも出来るM N Kでも・・・さすがにM N Kも法律は変えられないでしょう。」

「ええ、まあ。そうですね。」

古林が濁した返事を、山羽は不審に感じたのだろう。ドアノブに手をかける古林に、

「MNKって、一体何なんですか。」

と、問い掛けてみる。

古林はドアの向こうを見つめたまま、

「さあ、何なんでしょうね。」

短いため息をついた後、ドアの向こうの少年を二人は確認した。

直人は、小学五年生の身長よりもやや低めだ。「あっ」と呟いた声も高いソプラノの音で、ベッドから体を起こして、おどおどする様子はまるで小動物のようだった。

「直人君、調子はどうかしら？」

「・・・元気です。」

下目づかいに古林の後ろにいる山羽を見た。

「こちらは、山羽さんよ。」

「やまは？」

直人が首を傾げる。

「珍しい苗字だろ。」

直人が頬を染めて「違うんです」と恥ずかしげに笑った。

「ピアノとか、楽器の会社の人かと思って・・・」

幼い顔が、愛らしい。山羽もつられて口角を上げていた。

「直人君。この人は刑事さんよ。」

途端に、少年の顔は強張った。

「屋上から落ちた時の事を聞きたいそうなの。」

直人は、二人の顔を交互にみた後、今にも泣き出しそうな声で、

「僕、警察に捕まるの？」

と聞いた。

「いいえ。話を聞いただけよ。」

優しく古林がいうと、直人は落ち着きを取り戻して、布団の上で体育座りになった。

「でも、僕あんまり覚えてないんです。・・・落ちたときの事。」
「落ちる前は？誰かと一緒じゃなかったか？」

「ちよつと山羽刑事。取り調べじゃないんですよ。」

古林が睨むと、彼は小さく舌打ちした後、出来るだけ優しい口調で質問した。

「直人君は、どうして屋上から飛び降りたのかな？あんな所から落ちたら、普通なら死んでしまうと思うだろ。君は小学五年なら分かるはずだ。それとも、始めからその気だったのかな？」

直人はベッドの横の引き出しを見つめた。何かを引き出しの中に閉じ込めているのか、想像を巡らす但当て嵌まるものを見つけないことが出来なかった。

「何も・・・覚えてないんです。」

古林が、持っていた細長いケースをベッドに置いた。

「お母さんから、渡して欲しいって。」

直人がケースを開けると、中には小さな電子ピアノが入っていた。

「落ち着かないとき、弾かせて下さいって。」

「ありがとう。」

電源を入れて「ド」の音を鳴らす。

それまで、おどおどしていた瞳が、ピタリと動かなくなった。

もう一度「ド」の音が奏でられた。

「そうだ。」

直人が、栗色の髪の毛を揺らした。

「僕、上靴を探してたんです。」

「上靴を？」

「どこを探しても見つからなくて、屋上に上がったんだ・・・そうしたら、そこに武本君がいて。」

『あそこに落ちてるぜ』

言われるまま、渡り廊下の屋根を屋上の手摺りを握って覗き込んだ直人を、武本は突き飛ばした。

武本とは被害者の名前である。

「確かに直人君が落ちた屋根には、上靴があったわね。あなたがその時履いていたのは自宅から持って来たスリッパだった・・・と言うことは、本当に無くなった上靴は屋根の上に投げ捨てられていたのね。」

「はい」と頷いた直人は自分の足を撫でた。裸足の足は透明感のある白色、うっすらと青い血管が描かれていて少年というよりは少女の足のようだった。

「武本君は、笑ってた。」

古林は、直人から目線を反らした。おそらく彼女はあの引き出しに落書きされたノートがあると勘付いているのだろう。

「そうだ・・・その時わかったんだ。僕のノートに落書きしたのも、靴を隠したのも。全部武本君がやった事だったんだって。だから、だから僕は・・・あああああああ！」

突然、奇声を発し、暴れ出した少年を、山羽は細い腕を掴んで押さえた。電子ピアノが大きな音をたてて床に落ちて破片が床に飛び散った。

「落ち着け！君の証言で良く分かった。君が落ちた後に武本君は死んでいる。だから君には彼を殺すことは無理だ。君が犯人じゃないことは証明された。」

「死んだ？」

直人が、大きく目を見開いて山羽を見た。

「知らなかったのか？焼死体で発見された。誰かに火を点けられて。」

直人の目から涙が零れた。

「・・・僕のせいだ。」

「え？」

「僕は、あの瞬間。武本君が燃えてしまえばいいと思ったんです。だから武本君は・・・」

古林の持っている小さめのスーツケースが、がたがたと動き始めた。

「しんだ。」

山羽は、ぞっとした。

思わず一步、二歩。後へ。

「僕が、ころした。」

少年を取り巻く空気が、そこだけ重力が変わったようにずっしりと重い。

古林が、耐え切れずにスーツケースを両腕で抱える。

「直人君、落ち着きなさい。」

「思い出したくなかったのに。こんなの生きてたってしょうがないよ。いやだ、いやだ、いやだ！」

「直人君？」

「無くなっちゃえばいいのに。」

こんな世界も

皆

皆

良く見ると、彼はうつすら笑みを浮かべていた。

「ダメ！」

古林の叫びが遠くに聞こえる。

世界が真っ白になる。

コンサート

直人は、車の中で迷っていた。

母親に、上靴が無くなったことを言った方が良いかどうか。言えばきつとまた悲しむだろうし学校にも連絡を入れるのだろうか。この前の音楽ノートが落書きされていた一件でも、母は電話で担任に厳しい言い方をしていた。「オタクの指導は」とか「教育委員会に連絡する」等、彼にしてみれば、余計学校に行きづらくなる訳だが、母親ともなると自分の子供を守るために当然の事をしていると思っているのだろう。

私には、母親がいなかったので分からないが、きっと母とはそういうものなのだろう。

直人の思念は強い。

コミュニケーション能力は低いが、平均した同世代の子供より知能が高い。おそらく親のそれと変わらないだろう。私に流れてくる彼の思考は気品漂った心地の良いものだった。遠く離れていても、思念が流れてくるのは、恐らく生まれ持った才能だろう。私は彼の心に浸るのが楽しみで仕方がない。

どうやら到着したようだ。

直人の父親は、ピアニストだ。明日の演奏会の為に、父親はここ数日練習に来ている。神経質な男で、本番と同じ所で何度も練習しなければ落ち着かないらしい。その演奏を直人は聴きに来るのだ。

直人が父親のピアノの音を聞いている時の彼の思念は、静かな中

で緻密な計算式を組み立てているようだ。言葉はない。純粹な感情が音进行处理している瞬間なのだ。

そして、父親が直人を呼んだ。直人は予め用意していた楽譜を持ってピアノの椅子に座ると楽譜の曲を弾き始めた。

曲は、有名な「トルコ行進曲」だった。

彼の音が、私の心をゆする。鍵盤の振動が私を軽く撫でると、直人の足もぴくっと震えた。

「もう少しだな。」

弾き終わった直人に、父親は優しく言った。

「そうだよね。」

残念そうに言う直人の頭を、父親の大きな手が優しく撫でた。

「さて、今日の夕飯は何かな？」

「・・・カレーライスだって。」

二人は椅子から降りて、母親の待つ車へと向かった。

直人は父親にも、上靴の事を言えなかった。

私なら直人を守ってやれるのに。

出入り口で、直人が私を直すのを躊躇していた。

私は、直人の「お気に入り」なのだ。

「持って帰っちゃ、だめかなあ。」

ぼそりと少年は呟く。

『かまわんよ。』

声に驚いた直人は、辺りを見回した。丁度、後ろでタバコをすっ

ている警備員がいたので彼は勘違いして、「ありがとう」と、小さな声でお礼を言って駆け出した。

私は、ようやく彼だけの物になったのだ。

次の日、直人は私を小学校に持っていった。

いつもの事なのだろう、教室には行かず、音楽室に向かう。

「あれ？」

どうやら、いつもと様子が違うようだ。

「ごめんなさい、直人君。しばらく教室が使えなくなったのよ。」

直人の思念から、彼女が音楽の教師だと言うことがわかった。彼女の言うことには、昨日この音楽室で火事があったらしい。原因はタバコの不始末で、近くにある私立の素行が悪いので有名な中学校の生徒数人が、放課後に忍び込んでタバコを吸っていたらしい。幸いボヤ程度で教員が気づいて消火されたが、ピアノは処分せざるおえない状態だった。説明を聞いている間、直人の顔がどんどん暗くなってゆく。

「ちよつとの間よ。もう一つの、使われてなかった音楽室を開けて貰える事になったから、掃除が終わったらいつでもいらっしやい。」

直人は頷いて、音楽室から離れたが、自分のクラスに戻るのは怖くてできなかった。

彼にとって、あの空間は息苦しく、同級生の目も何故かとても恐ろしいものでしかなかったのだ。先日のノートに落書きをした犯人も見つかっていない。母親に言っていないだけで、直人は他にも嫌がらせを受けていたのだ。誰か判別が付かないよう人ごみに紛れて石を当てられた事もあったし、机の上には「学校にくるな」と彫刻

等で彫られたこともあった。

直人は仕方なく、無くなった上靴を探すことにした。

思い当たる場所は、担任の教師も探してくれた。他にはどこが残っているだろうと考えた直人は、屋上に向かうことにした。

屋上は陽の光を受けて白く反射していた。思わず目を細めてしまいうくらいの眩しい光の中で、同級生達は鬼ごっこをしていた。音楽室が使えなくなった事で気が動転していたのだろう、昼休みで大勢の生徒と出会うことになるのを直人はすっかり忘れていた。

直人はその群を避けるように歩いた。

「おい、見ろよ。神崎だぜ。」

一人の生徒が直人を指差した。

「ホントだ。今日は学校に来てたんだな。」

直人は彼らを見無視して上靴を探し始めた。

「なんかやってるぞ。気持ち悪いなあ。」

「あいつ、上靴無くなったらしいぜ。」

「捨てられたんじゃないね。」

言いたい放題の生徒達を、直人は唇を噛み締めて我慢した。

「あー。嫌だ、いやだ。戻ろうぜ。」

チャイムの音で生徒は教室へと戻っていった。静かになった屋上で隅々まで探したが、見つからなかった。直人が諦めて階段を降りようとする時、

「俺、どこにあるか知ってるぜ。」

と、屋上に残っていたらしい武本が直人を呼んだ。

「どこに、あるの？」

「見ろよ。渡り廊下の屋根の上。落ちてるぞ。」

直人が手摺りを握って覗き込むと、確かに自分のかはわからないが上靴がのっていた。

「ホントだ。あれ、僕のかも。ありがとう、武本く……」

始めは一体何が起こったのか分からない様子だったが、直人は武本が両腕を伸ばして笑っているのが見えた。そして、自分が今まさに屋上から地面へと落ちていくのだと遅れて理解した。

「どう……して？」

武本はズボンで両手を拭いていた。まるで汚いものでも触ったように。やけにスッキリとした顔で直人が落ちてゆく様を見つめていた。

「そうか、君が。」

彼が上靴を投げ捨てたのだと直人には解ってしまった。これまでの様々な嫌がらせも全部、武本の仕業だったのだと。

どんどん落ちてゆくスピードが早くなる。

それなのにどうしたものか、直人は、非常にゆっくりとした時間だと感じた。自分を見つめる武本が遠ざかってゆく中で、砂時計の様に積み上がっていく黒いどろどろとした憎しみが直人の喉を動かそうとした所為かもしれない。

「武本君なんて、死んじゃえばいいんだ。」

あのピアノの様に。

燃えて真っ黒になってしまえ。

どん

直人の記憶は、そこで途絶えた。

代わりに、校舎中に聞こえる叫び声が屋上から発せられる。

直人。

君が望むなら、どんな願いでも叶えてあげよう。

君のその純粹な魂が、私はとても気に入った。

君のその美しい音色を守れることができるのなら。

君を傷つけた少年も、二度と君を汚さないように。

君のその透き通った心を守れることができるなら。

世界を消し去る事だって私はやってあげよう。

イプシロン

「間一髪とはこの事だな。」

1 番低い鍵盤の音がした。

一面真っ白な世界。

直人が目を開けると、正面に椅子に座った男と黒い犬が待っていた。

男は携帯電話で誰かと話しをしている。

「大丈夫。直人君と彼もここにいるよ。局長には伝えてあるから。じゃ、またね。古林君。」

色の付いた眼鏡でどこを見ているのかわからないが、何かを見つけたのかと思うと白い歯を見せて笑った。

「神崎直人君だね。」

滑らかな、さっきの低い声とは違う声がした。

「ちよつと場所を移させてもらったよ。びっくりしたかな？」

「えっと・・・」

直人が上手く話せずにいると。

「僕は五十嵐和昭と言います。古林君と、お友達なんだ。こっちはアルファ。」

「よろしく。」

「い・・・犬がしゃべった！」

黒い犬は欠伸をしながら、

「大袈裟な子供だな。」

と、なんでもない事の様に行った。

「ふふ。山羽刑事もこんな感じだったじゃないか。」

「あの男は、また別だよ。」

バリトンの低い声が空間を包み込む。

「ここ、どこ？」

緊張が溶けたのか、直人はやっと思っていた事を尋ねることが出来た。

「アルファが作った空間なんだけど、わかって貰えるかな？」

「アルファって・・・このワンちゃんか？」

「・・・ワンちゃん。」

五十嵐は耐え切れずに吹き出してしまった。

「直人君。アルファはこう見えて、とっても凄いワンちゃんなんだよ。」

「教授まで。」

アルファの尻尾がぺたりと垂れた。「ワンちゃん」発言はアルファに深いダメージを与えたらしい。

「ごめんなさい。えっと、アルファ・・・さん。」

アルファは鼻をフンツと鳴らして、

「かまわない。が、『さん』は付けなくていい。呼び捨てで構わないよ。」

と、オスワリのポーズをとった。主人が何かを話そうとしているのが分かったからだ。五十嵐はお礼のかわりにアルファの漆黒の毛並みを撫でてあげた。

「直人君。アルファは何でも出来るんだ。例えば、世界をひとつ跳びできるし、欲しいものなら何でも手に入れることが出来る。この空間だって、僕らが話をする為だけに作ってくれたんだよ。」

五十嵐は、立ち上がって腕を延ばした。

「直人君。ちょっとこっちに来てくれるかな？僕は目が悪くてね。」
直人が腕に触れると、ありがとうと五十嵐は優しく言った。

「直人君は、思念が強いんだね。」

「しねん？」

「思っていることや考えていることが他の人よりも、ずっと強いんだ。」

「それって、悪いことなの。」

「ううん。良いことなんだよ。直人君はきっと、僕と君とが同じ物を見たときに感じる感動の大きさが違うんだ。僕が何とも思わず通りすぎるものに対して、君は立ち止まってじっと考えたり驚いたりしてるんだ。素晴らしいことなんだよ。」

少年はホッとしたが、アルファは険しい顔を見せた。

「ただ、思念が強いと我々は嫌でも耳にしてしまう。今だって君はさっきの壊れたピアノの事が気になって仕方がない様だ。この状況の中で・・・思ったよりも冷静な子供かもしれないな、教授。」

直人はドキッとした。さっき自分を取り乱したせいで、床に落ちて壊れてしまった電子ピアノの事を本当に考えていたらしい。

「ご・・・ごめんなさい。」

「いいんだよ。アルファ、頼めるかい？」

「仕方がないな。」

五十嵐の手が心地良いらしく、アルファはうっとり目を閉じていた。猫の様に喉がゴロゴロと鳴る。

「さっき空間を造ったのに、また働かないといけないのかね。本当に困った少年だ。」

「僕の、所為なの？」

アルファは、うっすらと目を開ける。黄金色の瞳が冷たい光を放った。

「その通りだ、神崎直人。君が『この世界なんて無くなればいい』なんて発言するからだ。」

アルファの声は、ピアノの1番下の音より低かった。

直人は寒気を覚えた。

「今後は、よく考えてから物を言う事だ。今回は、我々が監視していたから間に合ったが、こちらも暇ではないのだよ。気付いた時にはもう遅い、なんて事も考えられる。それに、『彼』は、非常に単純な男でね。」

「彼って・・・？」

「それはね。」

五十嵐が、床に膝をついた。直人の身長より、五十嵐の方が低くなった。サングラスがずれて、水晶のような眼が直人の瞳を捕らえた瞬間、少年は身動きがとれなくなった。

「君も、僕みたいにアルファのような力を使えるようになったんだよ。」

がた

直人の後ろで音がした

振り向くと、古林が持っていたスニーカーが置いてある。

「開けてごらん。」

直人がスニーカーを開ける。

「これは。」

中には、白いスリッパが入っていた。

「いくらなんでも、持ち主としては年齢が若すぎたんじゃないか？イプシロン。」

直人の背中からアルファの呆れた声が低く響いた。

「イプシロン？」

直人の呼び掛けにも応えなかったイプシロンに対して、黒い犬は舌打ちした。

「なるほど・・・選ばせるつもりか。」

少年は外見と比べると割と大きい手の平の上にスリッパを載せた。
「この、スリッパがアルファみたいに凄い力を持っているの？まさか、そんな事・・・」

「君のクラスメイトを殺したのはイプシロンだ。そして、屋上から落ちた君を助けたのも彼だよ。イプシロンは君に、持ち主になって欲しいんだろう。」

「僕が持ち主になったら、願事がなんでも叶う？」

「まあ、出来ないことはないな。」

「じゃあ。」

直人はぐくりと唾を飲み込んだ。

「武本君を、生き返らせることができるんだね？」

アルファは、直人の期待通りの言葉を聞かせてはくれなかった。

首を振って、出来ない事を表した。

「今、出来ないことはないって言ったじゃないか。」

「出来ないことは、ない。が、それをすれば世界が歪む。」

「歪む・・・？」

直人の周りをくるとアルファは歩き始めた。どうやら解りやすく伝える為の言葉を探しているようだったが、それよりも五十嵐が早く口を開けた。

「過去を変えると起こるんだ。例えば、武本君を生き返らせるとしよう。でも、彼が過去に死んだ出来事はすでに周りの人間に知られているだろう。事実を無理やり変えてしまうと、本当の事と変えてしまった事が喧嘩するんだ。それが歪みだよ。」

「歪みが起こると、どうなるの？」

「アルファによれば、世界のどこかで必ずおかしい事が起こるらしいんだ。歪みは事実に関わっている人間に比例するらしくて、武本君の場合は事件にもなってニュースでも流れていたから・・・関わった人間が多すぎるんだよ。だから、アルファは出来ないと言ったんだ・・・僕の言ってる事、わかるね。」

直人は泣きながら頷いた。

もう、どうしようもない事なのだと。

「君の所為だが、君は悪くない。全てイプシロンが勝手にやった事だ。持ち主の願いを全て聞き入れる必要は、我々にはないのだから。さっきも言ったように、イプシロンは単純な奴なんだ。」

アルファが、頬の涙を自分の鼻で拭ってくれた。

「そんなこと無いよ。どうして僕はあの時あんな恐ろしい事を考えてしまったんだろう。どうかしてたんだ。」

直人は顔を伏せた。背中が震えているので泣いているのだろう。

「本当に、君はどうかしていたのかね？ 私には、君を屋上から突き落とした子供のほうが、よっぽど頭がどうかしてると思うが・・・。そんな人間が焼け死んだからといって、なぜ、君が悲しまなければいけないのかね。」

「だから、イプシロンは彼を選んだんじゃないかな。」

五十嵐が、直人の背中に手をあてた。暖かくて優しい手だった。

「イプシロンは、きっと君を苦しめたことを後悔しているんだよ。だから、話をする事をためらっているんだ。直人君が、イプシロンの持ち主になると決心してくれたら。イプシロンを君に預けよう。」

直人は、顔を上げなかった。ただ、聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声で、

「怖いよ。」

と言った。

「直人君の気持ちは、良く分かるよ。だから、決めて欲しいんだ。君がもし、イプシロンをいらないと言ったら、MNKが預かる。ただ、イプシロンは直人君以外の持ち主をきつと選ばないから、直人君がおじいさんになって死んでしまうまでケースに入れて保管され

る。これは、直人の思っていることを聞こえないようにする為だよ。君は思念が人より強いから遠いところにいても声が聞こえてしまうらしいからね。これで、安心して生活できるだろう？」

アルファが、つまらなそうに欠伸をした。

「そろそろ、空間を閉じさせてもらってもいいかな。あとは、また考えればいい。イプシロンは局長室で預かるよ。欲しかったら取りに来ればいい。」

直人が顔を上げると、そこは病室のベッド上で、古林と山羽が心配そうに見つめていた。

壊れたピアノ

山羽によれば、直人はパニック状態に陥った後、床に崩れ落ちたらしい。

古林は、山羽には聞こえないように「五十嵐教授から話は聞いているわ。眠ってる間、アルファに会ってたんでしょ。」

と聞かれたので、直人は小さく頷いた。

「僕のピアノは？」

と、聞かれた美智子は始め、きよんとしていたが、ベッドの側に置いてあったケースを取り出した。

「どうして持つてるって分かったの？お母さんがピアノを弾くと落ち着くからって預かって来たのよ。」

言われて直人もきよんとした。

電子ピアノは古林自身が直人にすでに渡していたはずなのに。その事が無かった事になっている。ピアノはまだケースから開けられたような様子もなく直人に手渡された。

山羽が、何かに違和感を覚えて古林に問い掛けた。

「もう一つ、何か持ってたかったか。」

おそらく、イプシロンの入ったケースの事だろう。直人が慌てて、

「それは、アルファが・・・」

古林だけに聞こえる様に囁くと、彼女は大人の笑みをみせた。

「始めから、このケースしかありませんでしたけど。ね、直人君。」と、山羽に見えないようにウィンクした。

「あのスリッパ、ウサギみたいにフワフワで暖かったわ。」

「何の話をしてるんだ？」

「あ、そうそう。山羽刑事。」

高いヒールの音を鳴らしながら近づいていく。思わず体を反らした山羽のネクタイを、古林は引っ張って顔を寄せた。

「先程、おっしゃいましたよね。直人君が犯人じゃ無いことは分かった、って。」

刑事は、眉を寄せた。

「た、確かに言った。だけど、違うという証拠が無いことには、どうにも・・・」

「そんな物。適当に見繕ってきたらいいじゃないですか。誰かから嘘の証言を貰ったことにするとか。」

「出来るか！そんな事、警察を舐めるな！」

直人は、不安な眼でピアノを見つめた。

「僕、捕まってもいい。その方が・・・いいんだ。」

古林が、ネクタイから手を離れた。体格の良い山羽がよろけるのを、笑いもしなかった。

「何言ってるの？あなたは犯人じゃないのよ。」

「でも、やっぱり。思ったことが現実になんた・・・んじやないかと思うんだ。」

直人が言葉を濁したのは、事情を知らない山羽がいたからだ。

「でも、山羽刑事。ライターとかマッチみたいな犯行に使った道具は、まだ見つかっていないんじゃないですか。」

山羽の眉がさらに真ん中に寄る。

「もしかしたら、偶然が重なった自然現象かもしれないじゃないですか。」

「不思議が大好きなMNKから出た言葉だとは考えられないですね。いつもなら、『子供の持つ潜在能力が引き起こしたサイコキネシスだ』とかなんとか騒ぐくせに。」

古林が悔しそうに下唇を噛むと妙に色っぽく映る。

「そっ・・・。」

そんな顔するな。

とても言いたかったのだろうか。

どどん

突然、けたたましい轟音と共にドアが開けられた。

「大変です！」

白衣と眼鏡の王道を極めたような研究員が部屋に入って来た。

「もっと静かに入れないのかしら。」

古林が、苛立ちを覚えるのも当然だった。その場の空気に合わない、ジャンルの違う生き物が、物語を目茶苦茶にするのではないかと思ったからだ。

「古林さん。凄いですよおお！見てください、この僕の調査結果！」

素早く長い指で、書類をつまみ上げる。

「小学校から半径五キロ以内に、発電所があるんですよ。規模はそれぞれ違いますけどね。そして、この学校にはちよっと大きめのアンテナがあるんですけど、これがこうなって、それもあんなことになったら……。」

「どうなるのよ。」

「人が発火する可能性があるんですよ。解剖の結果、被害者は体の内側から燃えているのがわかりましたので、僕の考えが合っていれば……。」

研究員が、ペラペラと口を動かす横で、古林の瞳がキラキラと輝き出した。そして研究員の手を握りブンブン振り回し始めた。おまけに、鼻歌も歌っている。

「早速実験しましょう！これが正しければ、事件は事故になるじゃない。」

「ええ！やりましょう。我々は今から屋上に向かい実験を始めます。実験が終わり次第、結果報告します。あ、警察にも報告書を提出しますので。ではっ！」

今にもスキップしそうな歩みで部屋を後にした研究員を山羽は、
「ドラマじゃないんだから。」

と、呆れた様子で見送った。古林の顔はまだ、輝くばかりの微笑みをキープしている。

「お聞きになりましたあ？刑事。これが成功すれば、晴れて直人君は自由の身ですよ。」

「ええ、まあ。」

山羽は酷くつまらない言い方をした。顔に、『納得できない』と書いてあるようだ。

そんな事を気にもせずに、古林が直人の頭を撫でた。

「私だって、そんな自然現象なんて信じてないわ。だけど、何万回に一回の確率で起こったとしても不思議ではないんでしょう。だったら、誰も嘘だとは言えないもの。」

「古林さんは、どうして僕にそんなに優しいの？」

直人の質問に、古林は答えなかった。

「ピアノ、弾くんじゃなかったの？」

これ以上話が深くなるのを怖れたのか、古林は話を変えた。彼女の声のトーンがあまりに沈んだものだったので、直人は聞いてはいけなかったのだと後で後悔した。

「そ、そうだった。」

慌てて、直人が電源を入れる。

さっきと同じ様に『ド』の音を鳴らそうと、人差し指が鍵盤に触れた、その時。

バリバリバリバリ

「うわっ。」

「まあ、故障かしら？」

しばらくすると、ピアノは正常な音を奏で出した。

「ちよっと調子が悪かったのね。」

古林はなんでもない顔をしたが、直人の顔は強張ったままだ。

本当の事と、変えた事が喧嘩する
これが歪み

「大丈夫？」

古林の顔は真剣だ。

「僕、どうすればいいんですか。」

その顔は、母親に救いを求める子供の顔だった。

古林に子供はいない。

「私と言えることは、あなたが選ばないと何も始まらない、という
事よ。」

「どうして僕だったんだろう。」

世界の歪みの大きさは、変えた物事に関わった人間の人数に比例する。

ピアノを落として壊したことは、古林と山羽しか知らなかった。もっと人数の多い状況になれば、世界はどうなるのだろう。

直人は、恐怖と、

ほんの少しの好奇心を胸に秘めていた。

直人の目は、遠いところを見つめたまま、不安と、そして一つの答えを探していた。

報告書を書く刑事

真夜中の警察署内は人も少なく、静まり返っていた。

薄暗い部屋の中で、山羽のペンを持つ手は動く気配すらない。

MNKの報告書を睨み付けながら、考え込んでいるようだった。

推測するに、恐らく山羽はまだ彼らの実験結果に納得がいかないのだ。確かに被害者の遺体からみて人間が起こした業とは到底考えられない。環境と偶然が重なった事故と聞かれても、取って付けた話の様でしつくりと来ない。大体その実験結果とやらも、大掛かりな機材を持ち込んで行っていて現実味がなかった。

果たして本当に自然現象が引き起こした事だったのか。

山羽は、ふふっと笑った。

やれ不思議だ何だと騒ぐMNKに、いつもあんなに文句を言っている自分が今度は超状現象を信じている事が可笑しかったのだろう。午前中に出向いた小学校では、警察が話す内容に頷きはするものの、どこか半信半疑の教師の顔が忘れられない。教師によると、子供達が学校の裏サイトで「犯人は直人だ」と騒いでいるようだ。

本当に世の中に不思議な力があるなら、もしかすると直人は本当に人を殺めてしまったのかもしれない。だが、彼を捕らえる法律もなければ、それを証明できる方法もない。いや、MNKなら可能だろう。では、何故彼らはあのような陳腐な結果で済ませてしまったのだろうか。

山羽の脳裏に、ある一つの考えがよぎる。

「あいつら、知ってて・・・。」

思わず立ち上がった山羽は、古林に電話をかけようと机の上の携帯電話を握った。

「まてよ。直接、班長に報告したほうが・・・」
そこまで言って、山羽は凍りついた。

「まさか。」

緊張、というくらいではあられされない威圧感。
背中から首にかけて舐められるような気分の悪さ。

ぞっとする。

たびたび味わったことのある、この恐怖の理由を知っているから
振り向きたくない。

「近くにいろのか。」

返事はないが、後ろの存在は確かなものだ。
ゆっくりと後ろを振り返る。

暗闇の中に、二つの黄金色の瞳があった。

その瞳に向かって、山羽は語りだす。その声は何かとてつもなく
恐ろしいものに語りかけるかの様に震えていた。

「俺と呼んだのは、始めからM N Kにとって都合の良い様に報告書
を書かせる事だったんだな。」

ご名答、の言葉の代わりに、山羽の緊張は嘘の様に解けた。荒い

息を整えようと、深呼吸する。

「わ・・・わかった。M N Kが怒る様なことはしないよ。」

ふんっ

と、鼻を鳴らす音が聞こえた後、黄色い瞳は暗闇に溶けて消えた。

山羽は椅子に座り、素早くペンを動かして報告書を仕上げる。書き終えると、ポケットから煙草を取り出して火を付けた。まだ、手の震えはとまっていない。

暗闇の中で煙が漂って、ゆっくりと上昇してゆく。モヤモヤと灰色になった空間の中で刑事がゆっくりと目を閉じた。吐き出される白い煙が、本当の事実のように部屋の闇の中に溶け込んでゆく。

何が、不思議な力だ。

馬鹿馬鹿しい。

「どうせ俺の話なんて、誰も信じてくれないんだ。」

そうだ。

人間なんて真実か嘘かなんて本当はどうでも良いんだ。彼らは、自分の納得できる物事しか信じないのだから。

私も同感だよ、山羽刑事。

屋上の青年

屋上は、太陽の光を反射して白く輝いている。

「ずっと此処に行かなくちゃって、思ってたんだ。」

あれから、屋上に立ち入る事はできなくなったそうだ。
とても静かだ。

青年は、久しぶりに見る光景の中に思い出を探していたようだ。
だが、その顔から楽しそうな記憶が蘇っているとは思えなかった。
近づいてよく見れば、床の一部分だけが黒く煤けた所があって若干
の年月が経っているようだ。昔の美しい思い出のなかに紛れている
も、決して消えて無くなる訳ではないと、足元から訴えられている
ようだった。

強い風が吹いて、青年の体が少しだけ煽られた。
よるめくと、細い足が不規則なリズムで体を支える。

真っ黒な思い出の中に一輪の百合の花が落とされた。白と黒のコ
ントラストは、混ざり合う事なく存在し続ける事を意味しているよ
うだ。正しい事と悪い事、そればかりではないが、恐らくこの場に
立っている青年の目には、そう映ったのだろう。

両手を合わせた後、彼はしばらく屋上から見える景色を眺めてい
た。

雲ひとつ無い快晴の空。

ビルの一つ一つが、小さな玩具のように見える。
まるでジオラマだ。

青年の目に、この世界が一体どの様に映っているのだろう。

フアアン

車のクラクションの音が鳴った。

『そろそろ行こうか。』

どこからか、皺枯れた男の声が聞こえた。

「そうだね。」

青年は返事をする、

屋上には誰もいなくなっていた。

ある雨の日

この一週間ずっと雨が続けている。

頂上に続く細い道を、彼はゆっくりと歩いていた。足が悪いために、杖をついているのだ。

丘の上にある、一軒の家の前に立つと持っていた鍵を取り出してドアを開けた。

しばらく人の出入りした形跡の無い、湿ったカビの臭いが鼻についた。

おぼつかない足取りで、老人は廊下を進む。家の主人には身寄りが無く、家具も少なかったのでやけにスッキリとしている。整理された部屋には生活観が無く、老人の心にはわずかな不安が募った。

彼はわずかな期待を込めて、クローゼットを開けたり、机の引き出しを開けたりと部屋を物色し始めた。それが、彼の最後の仕事だからだ。

彼は若かった頃は、大層美しい青年だったのだろう。薄くなっているが金色の髪や、吸い込まれる様な青い瞳、整った顔立ちから、容易に想像できることだった。

「あった。」

彼の探していたものは、机の上の綺麗な箱の中に収められていた。男の持ち物としては似合わない、女性が宝石でも仕舞っている様な箱だった。

彼は、箱の中のものを取り出すと窓の外をみた。

雨は一向に止む様子は無かった。

この地域で雨が続くことは非常に珍しいようで、異常気象だと二

ユースで騒がれていた。

だが、彼には分かっていた。

この雨を降らせている原因となるものが、今自分の老いぼれた手の中に在るということ。

「スギモトは、死んだんだよ。」

老人は、まるで生きている物に向かって話しかけた。

「俺は、最後まで信じるつもりは無かった。だが、もしアイツがイカレタ奴じゃなく本気だったのなら、俺の言ってることが理解できるんだろう。」

静まりかえったまま、老人は話を続けた。

「いくら雨を降らせても、アイツが君を使ってくれる事は無い。だから、もう終わりにしよう。」

『私をどうするの?』

突然、女性の声が聞こえたので、老人は驚いたが、

「やっと、口を開いたな。」

『彼が、他の人と話しちゃダメって言ったから黙っていたのよ。』

と、悪戯っぽく言ったので思わず笑顔になった。

「そうだったのか。」

『あの人の顔、とても穏やかだったでしょう?』

「ああ、とても。」

『眠るように死んでしまったのよ。』

まるで、永遠の伴侶を失った未亡人の台詞だった。

老人は、持っていた鞆を開けた。

「俺の最後の仕事なんだ。君を連れて行かないといけない。わかるよな?。」

『ええ、知ってるわ。でも……』

雨の音がより強くなった。

『この雨は、どうしても止んでくれないの。分からなくなってしまったの、どうやって雨を降らしたり、していたのか。あの人を失ってから、私は……。』

「此処から離れば、止むんじゃないか？」

『どうかしら。』

声は、迷っているようだった。本当は思い出のつまった家から離れたくない、ただの言い訳かも知れない。老人は優しく、かつて彼女の持ち主が語りかけていたような口調で説得してみた。

「ベータ。大丈夫だよ、心配することは無い。」

『本当？』

「ああ。」

彼女は少し悩んだ後、『わかったわ』と返事をした。老人が彼女を鞆に入れようと触れた瞬間。

『ありがとう。でも……あなたじゃダメなの。』

彼女の言葉は、他の誰も受け入れない強くて純粋な愛そのものだった。老人は、本当はこの後で彼女がどのような扱いを受けるのか全く何も知らされていない。鞆を閉めると、老人はひどく気の毒そうな顔をした。老人の中で、かつての彼女の持ち主が幾度も囁いていた言葉の数々に初めて理解できるような気持ちになった。初恋の女性に告白するような、永遠の片思いの青年のような深く苦しい結ばれることのない恋愛。

彼はおよそ八十年近くを彼女と共に過ごしてきたのだろう。

老人は、ぞっとした。

「俺には、分からないな。」

よろよろと立ち上がると、老人は空き家を後にした。

外を出ると雨は止んでいた。

「ベータ。きっといつか君の心も晴れるよ。」

空には、変わりに大きな虹が架かっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9280p/>

アルファという犬

2011年2月8日00時55分発行